

「偏見ゼロ」教育

(原文)

清木 佳奈 (15 歳)

東京都

東京学芸大附属国際中等教育学校

「I don't want to partner up with a monkey (私、さると一緒に組みたくない)」アメリカに住んでいたとき、ダンスの授業で現地の子に言われた言葉だ。アメリカに引っ越して数か月の頃で、相手は私が理解できないだろうと思って言っただけ。ショックだった。組みたくないと言われたことよりも、私自身ではなく、日本人そのものを拒否しているようだったことがショックだった。他にも、英語の発音を真似されたり、日本人だからといって仲間に入れてもらえなかったりすることもあった。アメリカは多文化国籍でいろんな国の人に慣れているといったイメージがあるけれど、私が住んでいた地域は裕福で白人系のアメリカ人が多く、外人と距離がある感じだった。

「その服すごいね。アメリカの？」これは日本に帰国してから日本人の子に言われた言葉だ。そのままではわからない日本人独特の遠回しな言い方である。その言葉は服が変という意味だということに私が気付いたのはしばらく後だった。さらに「アメリカの？」と聞いてくるところがその子のアメリカに対してのイメージがよくわかる。

なぜアメリカでは日本人だから組まないと言われ、日本ではアメリカの服が変だと言われるのか。それはアメリカと日本との間に「偏見」や「差別」が存在するからである。お互いの文化の違いを受け入れず、批判してしまう。これがより大きな偏見や差別といった社会問題を生む。偏見はアメリカや日本だけではなく、様々な国のおきている。私は国と国との間でおきる偏見や差別をなくす教育が必要だと思う。偏見や人種差別は戦争や反乱を巻き起こす原因となり、国の状況をぐちゃぐちゃにかき乱す。身近にも私のように学校や公共施設で人種が違うがため、嫌な思いをする人も少なくない。これらの偏見を少しずつなくしていきたい。それぞれ違う考え方があるだけで、皆同じ人間であり、同じ世界で生きているということを伝えたい。

私は昨年からグループで日本の移民との共生生活についての研究を行ってきた。外国人に対しての偏見が移民と暮らしていく上で最大の問題となっている。移民を受け入れる側が移民への偏見を持ってしまい、移民の人たちを差別する。そうすると、移民と国民の間に亀裂が入る。その亀裂を埋めたい。日本は特に少子高齢化で、移民を受け入れる必要がある。島国で外国人への偏見が激しい日本で移民を受け入れるためには、偏見ゼロを目指した教育をしていかななくてはならない。そして、私たちが考えた教育方法が生徒対生徒の授業だ。生徒が生徒に教える。違う国同士でお互いの文化や価値観

を共有したり、話し合ったりする。同じ国でも帰国子女が、住んでいた地域のことを他生徒に教えたり、単純に考えをぶつけ合ったりして、違う意見を述べられることに慣れる。先生が大勢の生徒に対して行う授業だと一人一人の生徒と向き合うことは大変だし、先生と生徒ではある程度の距離がある。生徒同士だと自由に自分の意見をぶつけられる。既に偏見を持っていて考えが固まっている大人より、自分の考えを相手に押し付けない子供の方が「偏見ゼロ」教育には適していると考えた。

世界にはたくさんの国と文化が存在する。文化の違いによる問題が起きることは免れない。しかし、偏見や差別は文化の違いを最初から否定している。つまり、偏見と差別はお互いの考えを尊重し、理解することができれば、避けられることだ。子供の頃から文化の違いに慣れ、理解することを学べば、偏見はなくせるのではないだろうか。常識に囚われずに自由な考えを持つ人材を育てることが、これからの世界で重要になってくると思う。